

# 九〇にして自肅記

遠藤 利男

(日本エッセイスト・クラブ会長)

私はあと四カ月で満九〇歳になる。スペイン風邪から一〇年余、世界大恐慌の余波が残る一

九三一年九月、私は生まれ、翌日には満州事変が勃発した。それ以来、戦争、敗戦、復興、バブル、バブル崩壊、大震災と一世紀近くを生きた。人生の坂を上り詰めた向こうに見える風景は、環境破壊、劣化する民主主義、反知性主義。これでは私もそろそろ死に時かなと思っていたところに、新型コロナ・パンデミックが襲ってきた。罹患した高齢者は重症化し、中でも私のような超高齢者は、所謂トリアージュされ、病院の片隅に捨て置かれて終わるかもしれない。

そう思うと「コロナでは、死ぬまい」と決意が沸き上がった。

昨年五月中旬、第一回の緊急事態宣言解除後、私は東京での感染ストレスを避けて、妻と長野県にあるセカンドハウスに移った。第二次大戦を経験した私たち昭和世代の言葉で言えば「疎開」であり、私が選択した「自助」である。

折から山は春の初め。木々の枝から虫のような膨らみが吹き出たと思うと、数日の間に弾けて小さな若葉となり、透けて見えた青空をパッチワークのように埋めて行く。やがて山肌は浅緑のグラデーションに覆われた。

その山が紅葉で染まるまで続いた我々の自粛生活のルーティーンは、週に二度の巨大スーパーへの食糧の買い出し。毎日五〇〇〇歩の森の中の散歩、ほとんど人と出会うことがない。家の中では交代で三度の食事とその用意。東京から持参した本の読書、時折町の図書館に借り出しに行く。そして、コロナ情報を伝えるテレビ

## 遠藤 利男（えんどう・としお）



一九三一年、東京生まれ。NHKディレクター・プロデューサーとして、ラジオ「放送詩集」、テレビドラマ大岡信作「写楽はどこへ

行った」、テレビオペラ大江健三郎作・芥川也寸志作曲「ヒロシマのオルフェ」などの演出、大河ドラマ「国盗り物語」などの制作にあたる。NHK理事・放送総局長、NHKエンタープライズ社長を歴任。趣味は狂言、現在も稽古している。二〇二〇年より日本エッセイスト・クラブ会長

のニュースとワイドショウを見て、ぶつぶつと不満を呟き、昂じると政府の施策の愚かさへのしつてみたりする。このメディアの大転換期に、SNSもせず、オンライン飲み会も出来ない老人にとつては、双方向ではないが、これが唯一の世界との繋がりのなのである。

「不要不急」「自粛」が、メディアで毎日呪文のように聞かされる。「自粛」は老いを加速している。毎日散歩をしているからと言っても、身体に使わない部分は日に日に「萎縮」して行くようだ。先日まで楽に取れた棚の上のものが、取れない。脳も同じ状態になっているのではないか。自分の意思欲を自粛しているうちに、それに安住してしまふ。そしてこの「自粛」のムードはやがて、社会の無言の圧力によって個人を統制する力に替わってゆくのではないかと、恐れる。

それにしても、パブリックの場での言語の空虚化は進むばかりだ。国会中継でしばしば見る光景だが、質問とは意図的に擦れ違った内容の答えをする、再度の質問にも同じ言葉を繰り返す。もともと説得するつもりもコミュニケーションシ

ヨンするつもりもないのだろう。一九五〇年代に書かれたサミュエル・ベケットの不条理劇の舞台が生きた現実となっている。例えば、「桜を見る会」の参加者について「幅広く募っている」という認識でございまして、募集しているという認識ではなかった」と前首相は答えた。この言葉、コントのギャグではないとすれば、どう解釈するか、国語の問題としては難しすぎる。

パンデミック後の世界は、ペスト後もスペイン風邪後もそうであったように、パラダイム転換が起こるだろうという論者が多い。変えなければならぬのは確かだ。しかし、どう変えるか。上記のような言説で論を進め、何処へたどり着くのだろうか。最近日本でも流布され始めたSDGs（持続可能成長目標）の尻馬に乗っていれば良しとするのだろうか。

さて、日本の古典喜劇「狂言」の一篇「梟」を紹介し、この小文を「笑い」で終わろう。

太郎の弟が山に獲物をとりに行き、帰って来ると様子がおかしい。梟の悪霊に取り憑かれたらしく「ホーホー」と言うばかりで、ぐったりとしている。太郎は悪霊祓いの呪力を持つ山伏

に祈祷を頼む。しかし、山伏の呪文は一向に効かない。それどころか、太郎にまで悪霊は乗り移り「ホーホー」と言い出す始末。山伏は、これではならじと更に念力を込めて祈る。と、あるうことか、彼さえも突然、悪霊に取り憑かれて倒れてしまう。

度々疫病・災害に悩まされた日本中世に生まれた笑劇である。